

巨大地震を前にした小学校での防災教育
- 親子で学ぶ参加体験型防災教育の成果 -

名古屋大学大学院環境学研究科 教授 福和伸夫

3つの巨大地震、東海地震・東南海地震・南海地震、が切迫しています。これらの地震は、今世紀前半には確実にやってきます。過去にこれらの地震が起きた後、我国の歴史が大きく動いたことは歴史年表を広げるとよく分ります。この地震3兄弟は、日本の西半分が被災する地震です。前後には、兵庫県南部地震のような内陸直下での地震も頻発します。歴史に影響を与えることも不思議ではありません。国の調査では、3つの地震の被害規模は、あわせると最大で、死者が3万人弱、全壊する家屋は100万棟、経済被害は100兆円にも及びます。阪神・淡路大震災の10倍の規模です。このような国家予算規模の被害は、太平洋戦争以来のことです。可哀想ですが、いまの子どもたちは、非常に高い確率で大震災の渦中に巻き込まれます。教職員の防災教育への熱意が、彼らの将来を左右します。小学校でやれることは沢山あります。愛知県の場合、県民700万人に対して、小学校は988校、児童は約42万人、教員は約2万人もいます。教育委員会が本気になれば、直ぐに、これだけの教員が動けます。教員が約42万人の子どもたちに伝え、さらに子どもたちが家族に伝えれば、県民の1/5をカバーできます。こんなに影響力のある組織は他にありません。

今年度、県教育委員会が実施した「親子で学ぶ参加体験型地震防災教育」は、小学校が地域防災の核となれることを見事に証明しました。このような試みを全国に先駆けて8校で実施できたことは、地震防災や初等教育を考える上で画期的なことだと思います。この試みの手本は、昨年度、静岡県で実施された「親子防災スクール」ですが、県教育委員会が主体になった愛知県の試みは、半年間にわたる総合的な学習の時間での学習成果も盛り込んでおり、より足が地についたものになっていました。8校では、それぞれの学校の特性に応じた独自の工夫が随所に盛り込まれていました。私も、全ての学校に足を運ばせて頂き、生意気にも、毒舌(?)を吐きながら、防災意識啓発のお手伝いをさせて頂きました。そのときの、皆様の反応は素晴らしいモノでした。天候にも恵まれ、子どもたちは、生き生きと自分たちの学習成果を発表し、ナマズ号やはしご車を体験していました。この雰囲気は、閉塞感のある学校教育を変えるきっかけになると感じさせました。

今回の催しの話が持ちかけられたときは、各教育委員会や8校の関係者の方々は、きっと気が重かっただろうと思います。4月に8校の先生方とお会いしたときには、皆さん、お困りの様子でした。ですが、11月にお会いしたときの先生方の表情は全く違っていました。一番、啓発されたのは先生方だったかも知れません。地域への社会貢献の重要性が指摘されている中、8校の教職員・児童・PTAが、地域住民、市町村の防災・消防関係者、ボランティア団体の方々と、一致協力して催しを成功させた実績は、今後に繋がります。さらに、防災が、理科・社会科での学習成果を総合的な学習の時間の中実践できる題材であることも実証されました。小学校での防災教育の実践は、一石二鳥どころか、一石五鳥にもなる試みであることが実感できたのではないのでしょうか。

来年は、小学校48校で実施される予定と聞きました。きっと、8校の先生方には、いろいろな質問がくると思います。是非、技術的な話に加え、この催しの面白さ・成功の秘訣を多くの人たちにお伝え下さい。そして、できるだけ早く、県内全988校に広げていきましょう。そのために必要なことは、まず教職員の防災意識を向上させること、理科・社会科教育と総合学習を繋げ地域や歴史を知る活きた教育にすること、楽しく学べる良い教材を作ること、子・親・教職員を主役しつつも地域との協働を大事にすること、安全な学校・家・地域づくりに繋がる試みにすること、そして、自らが生き延び他人を救う術を子供達に体得させること、だと思います。

最後に、この素晴らしい試みを主導された県教育委員会健康学習課の方々に最大の敬意を表します。私自身は、子どもたちの力に圧倒され、アルファ米の食べ過ぎで、しばらく防災食は食傷気味でしたが、新年度には復活できそうです。これからも、お手伝いすることがあれば、気軽に声をおかけ下さい。